

原子価論から見たパーソナリティと 甘えの欲求不満への反応についての研究

片 岡 瑞 恵

A study on the relationship between amae frustration
and personality based on valency theory.

Mizue KATAOKA

奈良大学大学院研究年報 第16号別刷 平成23年3月

Reprinted from Annual Reports
of The Graduate School of Nara University
No. 16, March 2011

原子価論から見たパーソナリティと 甘えの欲求不満への反応についての研究

片 岡 瑞 恵*

A study on the relationship between amae frustration
and personality based on valency theory.

Mizue KATAOKA

要 旨

甘えが受け入れられなかったときに起こる情動的な反応として、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」といった反応が見られる。パーソナリティによってそれらの反応は違ってくるのではないかと考え、実証的な研究を行うこととした。よって、本研究の目的は甘えの欲求不満に対するそれぞれの情動的反応とパーソナリティ（原子価）との関係を明らかにすることである。

「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」についてのイメージに関する予備調査の回答例を基に、甘えの欲求不満に対する反応尺度の質問紙を作成した。因子分析を行い、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」という4つの因子が見られた。一元配置分散分析の結果から、甘えが満たされないとき、すなわち甘えの欲求不満の状態において、依存の原子価を持つ人は「すねる」傾向が強いことや闘争の原子価を持つ人は「うらむ」傾向が強いことが示された。

キーワード：甘え、原子価、パーソナリティ、すねる、うらむ、ひがむ、ひねくれる

I 問題と目的

1. 土居健郎による甘え理論とその応用

1) 「甘え」の定義と理論

まず本研究を進めるにあたり、「甘え」の定義について述べていきたい。土居（2007）は「甘え」について「一度失われた母親と幼児の擬似的一体感の回復を求めること」としている（p 118）。これは、母親という対象がわかるようになり、母親と一緒にいようとすることで安心感を求めるが、赤ん坊の甘えが母親に何らかの問題があって赤ん坊の甘えを満たしてやれない場合に赤ん坊はその甘えが満たされないために安心できず、親に対して信頼感を持ってない。そのために、親が一時的にでも自分のところから姿を消すと、そのことで別離不安を感じるようになるものだ

平成22年9月17日受理 *社会学研究科社会学専攻修士課程（臨床心理学コース）修了

という(土居, 1986; p55)。また、土居は「甘え」の最も簡単な定義として「人間関係において相手の好意をあてにして振舞うこと」であるとも述べている(2001; p65)。

それに対し、竹友(1988)は土居の「甘え」理論の定義が曖昧であることを指摘し、「関わりあう(interact)二人の同意のもとに常識的な日常生活の常規の社会的拘束から一時的に解放されること」が甘えの基本的な意味であり(p133)、そして、「同意の上で常規の、ある拘束から解放された「意味の場」あるいは「関わりあいの場を規定するメタ言語」と定義している(p142)。そこで、土居(2000)はメタ言語であることを認めた上で、互いに同意するのはおかしいと述べている(p135)。また、山口(1998, 1999)は「常規の拘束」という概念の重要性について述べ、二人の同意ということによって甘えの適用範囲が限定されてしまうことを指摘し、「甘えを自分の行動や願望が相手の考える常軌にあっているか否かに関わらず、相手がそれを受け入れることを期待すること」と定義している。

その他にも「甘え」の定義は様々に述べられており、小此木(1999)は「甘えは自己の依存が同時に相手の喜びであるとの期待とその期待の確認を含む相互的な対人交流様式である」と述べている(p14)。また、北山(1999)は「甘え」という「求める愛」に対して、甘やかす側が「与える愛」で応えるとき、受け身的な欲求だとされる「甘え」は、母親または母親代理者の側の「甘えさせる」という積極的な適応と対になっていることを指摘している(p99)。

2) 「甘え」の類型

そして、土居(2001)は甘えには相手との相互的な信頼を軸にした「健康的で素直な甘え」と一方的な要求の形をとった「自己愛的で屈折した甘え」があることを指摘している(p109)。玉瀬・相原(2004)は「健康的な甘え」と「屈折した甘え」をさらに詳しく分類し、「甘え希求」「甘え受容」「甘え歪曲」「甘え拒絶」という4つの因子を挙げ、「相互依存的甘え」(希求・受容)と「屈折した甘え」(歪曲・拒絶)に分類している。

3) 「甘え」の欲求不満反応

さらに、土居(1987)は「甘えるというのは本来相手があって甘えるわけで、相手がなければ甘えることができず、相手が受け入れてくれるというところで初めて甘えが成立すること」を述べ、「よい関係があって初めて甘えるという感情が体験される」という。つまり、「よい関係がなくて相手がこちらを受け入れてくれない場合には甘えることができない。自然に甘えることができれば子どもは甘えたい欲求をそれほど意識しないが、甘えられないときにはかえって甘えたいという欲求が強くなる(p3)」とも述べている。また、「甘えというのは本来相手次第であり、不安定で傷つきやすく、甘えたくとも甘えられない時は、容易に恨みに転ずる。甘えは恨みの可能性を秘め、反対に恨みが全面に出ている時は内に甘えを秘めている。これは愛憎半ばする状態を称してアンビバレンス(両価性)というのに相当し、甘えだけで他に何も支えがないと、容易にアンビバレンスの状態に陥る危険が存する(土居, 1985; p40)」という。

また、土居(2007)は甘えが反対に恨みにもなるというアンビバレンスな状態だけではなく、甘えることができなかつた場合には容易に「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」といっ

た心理になることも指摘している。「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」の意味についてここで簡単に言及しておきたい。土居は「ひがむ」とは「自分が不当な扱いを受けていると曲解すること」、「ひねくれる」は「甘えることをしないで却って相手に背を向けること」、「うらむ」は「甘えが拒絶されたということで相手に敵意を向けること」である（p 47）と述べている。「すねる」の語意について土居は言及しておらず、大辞泉（1998）によると「素直に甘えられず不平がましい態度をとること」である。これらの語意も踏まえて鑑みても、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」といった心理は「健康的で素直な甘え」というよりもむしろ甘えが受け入れられなかった時に、一方的な要求の形をとった「自己愛的で屈折した甘え」ということができる。

さらに、竹友（1999；p 48）が甘えには「対人行動的甘え」と「精神内的甘え」があり、土居の甘えの理論は精神内的甘えの面が一人歩きをするようになったことを指摘しているように土居が対人行動に焦点を当てた記述は見られず、土居は他者とのつながり方については言及していない。そして、土居はどのようなパーソナリティの人がどういった反応を示しやすいのかということについても述べていない。また、玉瀬・相原（2004）は、「自己愛的で屈折した甘え」について「甘え歪曲」「甘え拒絶」の分類にとどまり、甘えが受け入れられなかったときに起こる「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」といった情動的な反応にまでは触れていない。さらに、山口（1998, 1999）が述べているように、「甘え」の反響は大きいにもかかわらず、「甘え」における実証的研究は少ない。そして、Bionと甘えをセットにした研究はなく、土居のBionに関する唯一の記述として以下のものがある。土居（1997；p 187）は「甘え」と集団において、Bionの理論を挙げ、甘えの観点から基底的想定グループ理論の「依存、闘争・逃避、つがい」についてのみ言及している。

そこで、私は実証的研究を通して、「甘え」の欲求不満（「甘え」が受け入れられなかったときに表れる「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」）に対する情動反応とパーソナリティとの関係について検証していきたいと考える。また、他者とのつながり方、対人関係に重きを置き、Bionの理論から対人関係を原子価としてとらえたHafsiの理論を交えて、甘えについて検証していきたいと考えた。この原子価を使用する有効性として、今までに見てきたような甘えの定義を鑑みて、甘えは相手との相互的なつながりが必要となることから、人と人とのつながり方を測定する原子価を使用するのが適切であると考えたためである。以下に原子価理論について述べていきたい。

2. 原子価理論

Hafsi（2007b）によると、Bionは対人関係や個人とグループの関係の結合を科学の概念である「原子価valency」から説明しようと試みた。原子価は科学の記号から代用した言葉で、具体的に述べると、化学物質であるCO₂がCとO₂とで手をつなぐように結合している原子価から、人と人との繋がり方の喩えとして引用されたものである。即ち、Bion（1961）は人間も原子と同じような原子価を持ち、原子同士のように原子価によって結合すると考え、原子価を「独立した行動パターンを通じて他者と瞬間的に結合する個人の能力」（p 175）とし、「基底的想定（basic

assumption) を創り出したり、それに基づいて行動したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態 (readiness)」(p116) として定義している。

Hafsi (2006, 2007b) によると、Bion (1961) は原子価の類型について述べていないが、幾つかの論述からの示唆によると、原子価のタイプは基底的理想と同様であり、「依存dependency」、「闘争・逃避Fight/flight」、「つがいpairing」が存在するという。その後、Bionの集団論に基づく様々な実証的研究を行ってきたStock & Thelen (1958) は理由を述べずに、「闘争」と「逃避」に分離させ、4つのタイポロジーを提案した。後に述べるように、闘争と逃避には共通の特徴があるが、1) 対人関係の持ち方、2) グループ状況に対する反応、そして3) それぞれの原子価と関係のある病理から見た相違もあるので、Hafsiもこのようなタイポロジーを用いている。

以下にそれぞれの原子価の特徴について述べておきたい。(Hafsi, 2007b資料より)

依 存：相互的依存による対人関係 [代表的な特徴①低い自己評価②他者の過剰評価③他者による評価の重視④他者に対する高い信頼感⑤強い共感(同情)⑥上下関係を築く⑦他者への頼り⑧他者に頼りにされたい]

闘 争：直面化による対人関係 [代表的な特徴①高い自己評価②ずばずばものを言う(自己主張する)傾向③相手の意見を要求する傾向④ライバル意識が強い(負けず嫌い)⑤コミュニケーション(批判・議論・討論)を好む⑥強い達成欲求⑦グループ(仲間・味方意識)の凝集性を重視⑧リーダーシップを発揮する]

つがい：相互密着による対人関係 [代表的な特徴①親密な対人関係を好む②強い好奇心③対人関係において明るく、親しく振舞う傾向④異性に対してアピール⑤目立ちたい傾向⑥少人数グループを好む傾向⑦挑発的態度⑧平等主義や正義感]

逃 避：葛藤回避による対人関係 [代表的な特徴①葛藤を回避する傾向②表面的人間関係を好む傾向③感情的な距離を置く傾向④責任を負う意見や助言を控える傾向⑤対人関係における消極的(内気で控えめな)性格⑥リーダーシップや責任を伴う地位に対する回避傾向⑦人に対する逆依存(遠慮)的傾向⑧観察力]

Hafsi (2006, 2007a) によると類型に関するもう一つの問題として、上述した原子価に関するものがあるという。Bionのみならずその他の研究者も述べておらず、以下のようにHafsiによって唱えられた。前述のように、4つの原子価が存在し、人は全ての原子価を出すことが可能であるが、1つの主要な原子価すなわち「活動的原子価」があるとHafsiによって述べられている。また、他の3つの原子価は「補助的原子価」と呼んでいる。「活動的原子価」とは対人関係において頻繁に示す原子価で、「適応機能」があり、「補助的原子価」とは何らかの理由で活動的原子価の表現が不可能な場合に用いられる原子価で、「補助的機能」があると考えられる。即ち、人は補助的原子価を用いることによって、関係を維持し、変化に対する防衛的手段として用いることになる。

Hafsi (2007a) は原子価を精神分析的概念として用いるためには、まず、精神分析、特に対象関係における理論的な位置づけについてとその精神発生論を明らかにすることが必要であるという。Bion並びにこの概念を用いる研究者はこのようなことを行っておらず、Hafsiによって以下のような仮説が立てられた。原子価は早期の対象関係の所産であり、Klein (1946) によって述

べられた早期の精神病的態勢（妄想分裂的態勢、抑うつ態勢）、前エディプス、エディプスの体験を通じて、対象との繋がりを学んでいくというものであるという。乳児が快楽の感覚を得るためには何もせずに、良い対象の介入を待つだけで良いということを経験していき、言い換えれば、乳児は依存することが良い対象と繋がり、快感を体験したり、安心したりするための手段であるということを見出す。よって依存の原子価の発生はこのような学習過程の所産であるとHafsiは述べている。次に、このような良い対象との繋がりが何らかの要因によって妨げられたりすることについても述べている。すると、妨げられたものを妬ましくて攻撃的な対象として恐怖や不安を感じるようになる。よって、自分を守るために乳児は幻想において対象を攻撃（闘争）したり、逃避したりしながら対象と関係を結ぶようになる。このような体験によって、乳児は闘争と逃避が対象と繋がる効果的な手段であることをだんだんと見出し、闘争と逃避の原子価が発生すると考えられるという。最後に、つがいの性愛化傾向を考えると、つがいの根元は両親のリビドーによる連結を認識できるようになる前エディプスの段階にあるという。両親が終わりのない性行為を行い、口唇愛的、肛門愛的、性愛的快感を与え合っているという幻想を抱くようになる。また、Klein (1928) のいう幻想において乳児は父親の現実的または幻想的なペニスとその関係を可能にする償いの力を持った“魔法的な道具”として体験する。従って、乳児はそれを取戻し、自分のサディズムによって破壊されたであろうとみなす対象及び対象との関係を償おうとする。よって、つがいの原子価の発生はこのような体験と、その特徴である両親の連結とペニスに関する乳児の幻想の結果であるとHafsiはいう。

次に、活動的原子価がどのようにして決定されるのかについてもHafsi (2007a) は言及している。乳児が1つの活動的原子価を好み、示し始めるのはエディプスコンプレックスの後期から潜伏期の初期の間であるという。エディプスコンプレックス前期の子どもにはまだ特定の活動的原子価がなく、乳児は異性の親に対して依存の原子価とつがいの原子価を、同性の親に対しては闘争の原子価を用いる。しかし、エディプスコンプレックスをワークスルーし、潜伏期と社会的・文化的教育段階に入ると子どもは社会規範や親（特に母親）と関係を持ったり、あるいは人と繋がったりするための基準に従わなければならない。さもなければ、母親の愛情や注意を受けることができなくなる。よって、子どもは母親の無意識的な強迫に負け、母親の期待に応じ、母親自身の活動的原子価に反映されている母親の基準に従うようになることによって、母親の活動的原子価を規範として取り入れるようになる。その結果、子どもは母親（あるいは母親の代理）と同一の活動的原子価となるという。

3. 目的

これまでに、甘えと原子価について述べてきた。以上の理論を踏まえ、本研究の目的は甘えの欲求不満に対するそれぞれの情動的反応とパーソナリティ（特に対人関係におけるあり方、あるいは原子価）との関係を明らかにすることである。

4. 仮説

本研究では以上の目的をふまえて、次のような仮説を立てていきたい。

まず、依存の活動的原子価を持つ人は様々な意味で他者が自分より優れていると無意識的、意識的に考えるので、人と繋がるために人を頼っていくしかないかのように振る舞う傾向にある。逆に、自分より劣っているとみなされる相手には自分と同一化し、共感し、依存を受け入れ、満たそうとする。したがって頼りにしたいまたは頼りにされたいという依存的な関係によって繋がろうとする傾向があるので、頼りにしたい時に頼りにできないと素直に甘えられないことに欲求不満を感じ、不平がましい態度をとり、「すねる」傾向が強いだらうと仮説を立てた。

次に、つがいの活動的原子価を持つ人は親しい対人関係を好み、人と個人的なレベルで付き合いたいという願望があったり、大集団より小集団を好む傾向があったりする傾向がある。よって、自分と仲の良い人が他の人と親しく接していると、自分が不当な扱いを受けているかのようにねじ曲げて考えてしまい、「ひがむ」傾向が強いだらうと仮説を立てた。

また、逃避の活動的原子価を持つ人は、過剰な遠慮をしたり、人との間の距離感やプライバシーを重視したりする傾向がある。そして、葛藤を対人関係における破壊的な要因として体験するので、葛藤のない対人関係を好む傾向がある。さらに、関係を維持するために、人との間に心理的または物理的な距離を置く傾向がある。感情的な対立を避けようとし、一見、内向的で冷たそうに見えるため、甘えたいのに甘えられない時には甘えようとはせず、相手に背を向けようとし、「ひねくれる」傾向が強くなるだらうと仮説を立てた。

闘争の活動的原子価を持つ人は批判したりするために他者との接触を求めるかのように見え、他者に甘えるということは話し合うといったようなコミュニケーションのつながりを求めることが考えられる。つまり、他者と議論がなされないと拒絶されたような気がして、欲求不満を感じ、高い競争心からも甘えられない相手に対して敵意を向けてしまうのではないかということで、「うらむ」傾向が強いと仮説を立てた。

ただし、一般的に甘えは依存の原子価を持つ人によく見られるもので、闘争の原子価を持つ人には見られないものではないかという疑問もあるだらう。依存の原子価を持つ人によく見られるように感じられるのは依存の原子価を持つ人が意識的に甘えを感じたり、甘えを受け入れたりすることが闘争の原子価を持つ人よりも容易であることも理由として考えられる。しかし、本研究では土居の定義している甘えを支持していることから、ここで扱う甘えは無意識的な甘えであって、本人が甘えていることを認識のできる類の甘えではなく、どの活動的原子価を持つ人にも普遍的に甘えが存在することを前提としてこの研究を進めていくことに言及しておきたい。

以上の問題を踏まえて、実証的研究を行いたい。

Ⅱ 方 法

本研究では以上の仮説を検証するために、以下のような方法で分析を行った。

1. 調査対象者

大学1年生67名、大学2年生29名、3年生93名、4年生26名、その他34名の合計249名(男性131名<53%>、女性118名<47%>)を対象に実施した。

但し、因子分析に使用した人数は100名（男性51名、女性49名）のうち除外数が7のため、実際に分析に使用された人数は $n=93$ である。また、分散分析に使用した人数は167名（男性87名、女性80名）のうち除外数が3のため、実際に使用された人数は $n=164$ である。分散分析には原子価のデータのある人のみの使用となる。

2. 尺度

1) 甘えの欲求不満に対する反応尺度

本研究は質問紙調査の作成にあたり、予備調査を行い、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」のそれぞれに対し、「それはどのようなものですか。また、どのように感じますか。」という質問をし、言葉のイメージについての回答を求めた。予備調査を行った目的としては辞書的な意味ではなく、学生が考える「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」のイメージがどういふものかを調べるために行った。

回答の中には表1のようなものがあった。

表1. 言葉のイメージの回答例

すねる	<ul style="list-style-type: none"> ・口数が少なくなり、笑ったり明るく喋らずにじっとしている。構ってもらいたいのが分かる。 ・自分の思った通りに行かないと、やる気がなくなるなど。まあ、しょうがないと感じる。 ・自分はその人にかまってもらいたいのに、その人に相手にされなかったりするともういいやってなる。 ・自分の行動や気持ちを分かってもらえない時などに、投げやりになるようなものだと感じる。
ひがむ	<ul style="list-style-type: none"> ・自分よりも他人が何かしら秀でていたとしたら、それをうらやむイメージ。 ・自分にはないものを持っているとおきる。
ひねくれる	<ul style="list-style-type: none"> ・わざとあまのじゃくな意見を言うこと。 ・素直に相手の申し入れを受けない。 ・自分に悪いところがあるのに自分は悪くないと思い、そのように大げさに振舞うこと。
うらむ	<ul style="list-style-type: none"> ・何か嫌なことをされた相手に悪い印象をもつ。 ・相手にひどい仕打ちを受ける、傷つけられるなどの事柄を通して、自分を破壊された部分を修復しづらい状態の気持ち。 ・怖いイメージ。 ・相手に抱く怒りが、時間が経っても消えずに残っている感情。

表1のように、「すねる」のところの「自分はその人にかまってもらいたいのに、その人に相手にされなかったりするともういいやってなる。」というのはQ2の「わたしは受け身的な態度をとってしまうことが多い。」という項目にした。次に「ひがむ」の項目では、「自分にはないものを持っていると起きる。」というのを、Q8の「自分にはないものを持っている相手を羨ましく思

うことがある。」という項目にした。ひねくれるは、「わざとあまのじゃくな意見を言うこと。」というのを、Q9の「わたしにはあまのじゃくなところがあると思う。」という項目にした。うらむは「相手に抱く怒りが、時間が経っても消えずに残っている感情。」というのをQ16の「嫌なことをされた相手に悪い印象を持ち続けることがある。」という項目にした。

以上のように表1の言葉のイメージの解答例を基に、「すねる」を10項目、「ひがむ」を8項目、「ひねくれる」を5項目、「うらむ」を7項目、全体で30項目の5件法による質問紙を作成した。その質問紙を作成後、質問項目にわかりにくい点はないかなどのチェックをするため、学生に対してその質問紙に対する2度目の予備調査を行った。

2) VAT (Valency Assessment Test)

Hafsi (1997, 2004) によると、VAT (Valency Assessment Test) はBion (1961) の理論に基づいて開発した文章完成法のテストをHafsi (2010) が日本語訳し、奈良大学版として開発したものである。VATの目的はグループ状況に対する反応やBionのいう「原子価Valency」を測定することである。本研究の対人関係を測る尺度としてはこの尺度を使用する。

内容としては、「依存」が5項目、「闘争」が5項目、「つがい」が5項目、「逃避」が5項目、協同指標が5項目の全25項目からなっている。記述された文章から、否定的反応か肯定的反応かということや反応の表現の仕方として知性的反応、感情的反応、曖昧な言動、明白な言動のいずれにあてはまるのかということを検討していく。1が否定的な明白な言動、2が否定的な曖昧な言動、3が否定的な感情的反応、4が否定的な知性的反応、5が肯定的な知性的反応、6が肯定的な感情的反応、7が肯定的な曖昧な言動、8が肯定的な明白な言動となっている。

採点方法は、全ての項目を1(否定的反応)～8(肯定的反応)に得点化した後、5つの分類(依存・闘争・つがい・逃避・協同指標)ごとに平均点を算出する。その結果、協同指標を除く、4つの原子価の平均点が一番高いものを対象者個人の持つ活動的原子価として使用する。

3. 手続き

本調査の調査期間は2008年6～7月にかけて2回と2009年10～11月にかけて2回行った。授業の最後に本調査(甘えに対する欲求不満尺度)に関する質問紙を配布し、回答を終えた者から順に回収した。2回に分けて、主にそれぞれ他の学生に対して実施し、その後、さらに他の学生に対しても2回調査を実施した。但し、合計4回の調査を行った中で、重複回答者は除き、それぞれ別の学生のデータを使用した。本調査は無記名で行い、質問紙データに加え、デモグラフィックデータとして性別、兄弟姉妹構成や続柄についても記入を依頼した。なお、4回目の質問紙調査ではデブリーフィングも行った。

Ⅲ 結 果

本研究において用いた分析は信頼性分析、因子分析、そして分散分析である。

1. 原子価の分布

依存の原子価が96名（男性57名・女性39名）、闘争の原子価が40名（男性12名・女性28名）、つがいの原子価が27名（男性15名・女性12名）、逃避の原子価が4名（男性3名・女性1名）の合計167名のデータを用いた。

2. 甘えの欲求不満に対する反応尺度の項目の平均値と標準偏差

次に甘えの欲求不満に対する反応尺度の項目の平均値の結果として、全体的に見て平均値が最も高かった項目はQ8の「自分にはないものを持っている相手を羨ましく思うことがある。」である（ $M=4.13$; $SD=.93$ ）。また、平均値が最も低かった項目はQ30の「自分が不利になるようにわざとゆがめて考えてしまうところがある。」であった（ $M=2.80$; $SD=1.07$ ）。

3. 甘えの欲求不満に対する反応尺度と因子分析

また、甘えの欲求不満に対する反応尺度30項目の因子構造を見るために、因子分析（主成分分析、バリマックス回転）を行った。固有値を1に設定して分析をかけた結果、8つの因子に分かれた。但し、回転後の収束が悪かったため、因子数を5、6などに変更し、再度分析を行ったが収束が悪かったため、一番収束が良かった4因子を用いることとした。また、「すねる」「ひがむ」「ひねくれる」「うらむ」それぞれの因子に質問紙の内容の意味が適合しているかを検討し、他の因子が紛れていないか検討を行った。その結果、表2のような4つの因子が抽出された。

表2のように、甘えの欲求不満に対する反応尺度の因子分析を行った結果、抽出された因子を構成する項目から判断して、まず、第1因子はQ14の「言い合いになった後、相手に対する怒りがおさまらないときがある」、Q16の「嫌なことをされた相手に悪い印象を持ち続けることがある。」などの項目は甘えが拒絶されたということで相手に敵意を向けることを表すことから「うらむ」と命名した。次に、第2因子はQ2の「わたしは受け身的な態度をとってしまうことが多い」、Q22の「自分のしたことがうまくいかなくて、元気がなくなることがある。」などの項目は、素直に甘えられず不平がましい態度をとることを示すことから「すねる」と名付けた。また、第3因子はQ9の「わたしにはあまのじゃくなところがあると思う」、Q21の「わたしは偏（かたよ）った考え方を主張するところがあると思う。」などの項目は、甘えることをしないで却って相手に背を向けることを表すことから「ひねくれる」とした。最後に、第4因子はQ26の「自分の方が劣っていると感じた時、優れている相手を羨ましく思う」、Q8の「自分にはないものを持っている相手を羨ましく思うことがある。」などの項目は、自分が不当な扱いを受けていると曲解することを示すことから「ひがむ」とした。よって、「うらむ」が6項目、「すねる」が6項目、「ひねくれる」が5項目、「ひがむ」が3項目得られた。

各因子の α 係数は第1因子が.790、第2因子が.748、第3因子が.728、第4因子が.628となった。

表 2. 甘えの欲求不満における因子

因子内容	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
第1因子：「うらむ」 $\alpha = .790$				
Q14 ・言い合いになった後、相手に対する怒りがおさまらないときがある。	.834	.036	.206	.018
Q16 ・嫌なことをされた相手に悪い印象を持ち続けることがある。	.810	.030	.076	.004
Q23 ・思うようにならないと、不満を持ち続けることがある。	.736	.197	.035	.149
Q15 ・ひどい仕打ちを受け、激しい怒りの感情が沸き起こることがある。	.847	-.062	.158	-.251
Q20 ・わたしはどちらかという怒りが顔に出やすい方だ。	.481	.292	.444	-.057
Q24 ・相手が気に入らないので、わざとよそよそしく振舞うことがある。	.484	-.036	.072	.312
第2因子：「すねる」 $\alpha = .748$				
Q 2 ・わたしは受け身的な態度をとってしまうことが多い。	-.042	.815	.046	.053
Q22 ・自分のしたことがうまくいかなくて、元気がなくなることがある。	.294	.572	.113	.118
Q 6 ・自分が構ってほしい時に相手にされないと諦めることが多い。	.118	.646	-.076	.262
Q 1 ・わたしはどちらかという口数が少なくなる方だ。	-.245	.521	.184	-.115
Q13 ・相手に構ってほしいと思うことがよくある。	.160	.555	-.012	.389
Q 3 ・自分の気持ちを分かってもらえないと、投げやりになってしまう。	.425	.486	.348	.151
第3因子：「ひねくれる」 $\alpha = .728$				
Q 9 ・わたしにはあまのじゃくなどところがあると思う。	-.075	-.163	.763	-.006
Q21 ・わたしは偏(かたよ)った考え方を主張するところがあると思う。	.168	.085	.641	.025
Q30 ・自分が不利になるようにわざとゆがめて考えてしまうところがある。	.235	.107	.604	.398
Q18 ・自分の態度は子どもっぽいと思うことがよくある。	.136	.436	.563	.177
Q29 ・どうせ～だからと相手のせいにしてしまうことがある。	.388	.175	.538	.241
第4因子：「ひがむ」 $\alpha = .628$				
Q26 ・自分の方が劣っていると感じた時、優れている相手を羨ましく思う。	.018	.119	.146	.813
Q 8 ・自分にはないものを持っている相手を羨ましく思うことがある。	-.143	.121	.140	.814
Q 7 ・自分がうまくいかないと、相手の成功を素直に喜べないことがある。	.504	.189	-.420	.805

4. 甘えの欲求不満に対する反応尺度と原子価の関係

因子分析によって得られた因子は因子ごとに加算して得点化したものを使用し、各因子における原子価との比較において、4つの因子に有意な差があるという表3のような結果が得られた。

まず、表3のように、第1因子の「うらむ」において有意な差が見られた ($F(3) = 39.24$; $p < .001$)。各原子価の平均値を見てみると、4つの原子価の中で闘争が最も平均値が高いという結果になった。また、第2因子の「すねる」において有意な差が見られた ($F(3) = 13.29$; $p < .001$)。各原子価の平均値を見た場合、4つの原子価の中で依存が最も高いという結果になった。次に、第3因子の「ひねくれる」においても有意な差が見られた ($F(3) = 5.67$; $p < .01$)。各原子価の平均値を見ると、4つの原子価の中においてつがいが最も平均値が高いという結果になった。最後に、第4因子の「ひがむ」においても有意な差が見られた ($F(3) = 5.37$; $p < .01$)。各原子価の平均値を見てみると、4つの原子価の中で逃避が最も平均値が高いという結果になった。

また、固有値は依存が3.88、闘争が3.05、つがいが2.55、逃避が2.27である。そして、寄与率は

表 3. 一元配置分散分析の結果 (主成分分析、バリマックス回転)

因子	原子価				有意水準
	依存	闘争	つがい	逃避	
うらむ	2.62 (.73)	3.00 (.45)	3.10 (.41)	3.08 (.21)	$p < .001$
すねる	3.51 (.62)	2.86 (.54)	3.08 (.62)	2.70 (.34)	$p < .001$
ひねくれる	3.18 (.69)	3.28 (.75)	3.73 (.47)	2.70 (.47)	$p < .01$
ひがむ	3.14 (.71)	3.68 (.92)	3.27 (.67)	3.83 (.43)	$p < .01$
固有値	3.88	3.05	2.55	2.27	
寄与率(%)	18.5	14.5	12.1	10.8	

注：固有値、寄与率は回転後の数値を示す。

依存が18.5%、闘争が14.5%、つがいが12.1%、逃避が10.8%となった。なお、これらの固有値と寄与率はバリマックス回転後の数値となっている。

次に分散分析の結果から4つの因子全てに有意な差が見られたが、その各因子がどの原子価間で差が見られるのかを検討するため、多重比較を行った。その結果、表4のような結果が得られた。

表4のように、第1因子の「うらむ」においては依存と闘争の原子価間に有意な差が見られ ($p < .001$)、また、つがいの間にも有意な差が見られた ($p < .01$)。闘争はつがいとの間にも有意な差が見られた ($p < .001$)。第2因子の「すねる」においては依存と闘争の原子価間に有意な差が見られ ($p < .001$)、また、つがいとの間にも有意な差が見られた ($p < .01$)。さらに、依存と逃避の原子価間にも有意な差が見られた ($p < .10$)。第3因子の「ひねくれる」においては依存とつがいの原子価間に有意な差が見られた ($p < .01$)。闘争はつがいとの間に有意な差が見られ ($p < .05$)、またつがいは逃避との間にも有意な差が見られた ($p < .05$)。第4因子の「ひがむ」においては、依存と闘争の原子価間に有意な差が見られた ($p < .01$)。

以上の結果から得られたデータを用いて考察を加える。

IV 考 察

1. 一元配置分散分析の結果から

まず、一元配置分散分析の結果から第1因子の「うらむ」は4つの原子価の中において闘争が最も平均値が高いという結果になった。よって、闘争の原子価を持つ人は「うらむ」傾向が強いという仮説が検証された。また、第2因子の「すねる」は4つの原子価の中において依存が最も平均値が高いという結果になった。よって、依存の原子価を持つ人は「すねる」傾向が強いという仮説が検証された。ただし、一部因子において仮説とは違う結果となった。まず、第3因子の

表4. Bonferroniによる多重比較

従属変数	(I)原子価	(J)原子価	平均値の差		
			(I-J)	標準誤差	有意確率
うらむ	依存	闘争	-1.27***	.11	.000
		つがい	-.47**	.13	.004
		逃避	-.45	.31	.927
	闘争	つがい	.79***	.15	.000
		逃避	.81	.32	.082
		つがい	.02	.33	1.000
すねる	依存	闘争	.64***	.11	.000
		つがい	.42**	.13	.008
		逃避	.80+	.30	.056
	闘争	つがい	-.21	.14	.880
		逃避	.15	.31	1.000
		つがい	.37	.32	1.000
ひねくれる	依存	闘争	-.09	.12	1.000
		つがい	-.55**	.14	.002
		逃避	.48	.34	.976
	闘争	つがい	-.45*	.16	.049
		逃避	.58	.35	.612
		つがい	1.03*	.36	.029
ひがむ	依存	闘争	-.53**	.14	.001
		つがい	-.12	.16	1.000
		逃避	-.68	.38	.468
	闘争	つがい	.41	.18	.186
		逃避	-.15	.39	1.000
		つがい	-.56	.40	1.000

+p<.10, *p<.05, **p<.01, ***p<.001

「ひねくれる」は4つの原子価の中においてつがいが最も平均値が高いという結果になった。これはつがいの原子価を持つ人は「ひがむ」傾向が強いという仮説とは反するものとなった。また、第4因子の「ひがむ」においては、4つの原子価の中で逃避が最も平均値が高いという結果になった。これも、逃避の原子価を持つ人は「ひねくれる」傾向が高いという仮説とは異なるものとなった。以上の結果は、つがいと逃避の原子価を持つ人の人数が少ないことも理由の一つとして考えられる。もう一つは、つがいの原子価を持つ人も自分と仲の良い人と自分以外の誰かと仲良くしている状況を見て、他の人と仲良くするならば自分は必要ないと相手に背を向け、「ひねくれる」傾向が強いとも考えることができる。また、逃避の原子価を持つ人は葛藤を回避する傾向があるため、相手との感情的な距離をおき、甘えられない欲求不満を解消できない状態になると、自分が不当な扱いを受けているようにねじ曲げて考えてしまう「ひがむ」傾向が強いとも考えられる。

2. 本研究の効果

この研究の効果としては、原子価の特性からもパーソナリティの仮説を立てることはできるが、臨床現場で面接中に「うらむ」「すねる」「ひねくれる」「ひがむ」といった言動がクライアントに見られた場合、クライアントが甘えたいけれども甘えられない状況を察するとともに、今クライアントがセラピストとの関わりにおいて、どのようなつながりを求めてきているのかということを知るための手立てとなるのではないかと考えている。さらに、クライアントが具体的にどういふ反応を示すのかを予測することもできるようになるだろう。

3. 今後の課題

この研究の弱点としては、被験者が少ないこと、特につがいと逃避の原子価を持つ人の人数が極端に少ないことが挙げられる。今後、この研究を続けていくにあたり、データ数を増やすことでより信頼性と妥当性の高い結果を出せるようにしていきたい。また、今回の予備調査は各自で回答する形式だったため、その回答結果からは得られなかった無意識的な「自己愛的で屈折した甘え」を引き出すために、半構造化面接を取り入れることによって、さらなる回答を引き出すことが求められる。それにより、今回の質問紙の項目には含まれていなかった項目を増やすことで質問紙の質をさらに向上させていく必要があると考える。

付 記

本調査にご協力下さった奈良大学の学生の皆様とご指導下さった奈良大学のハフシ・メッド教授をはじめ、研究に対する助言を下された岡クリニック院長兼奈良大学大学院非常勤講師の岡達治先生、奈良大学の村上史朗准教授に心より感謝し、厚く御礼申し上げます。

文 献

- Bion, W. 1961. *Experiences in groups and other papers*. New York: Basic Books.
- 土居健郎 1985. 「表と裏」弘文堂
- 土居健郎 1986. 「精神分析と精神病理」医学書院
- 土居健郎 1987. 「「甘え」の周辺」弘文堂
- 土居健郎 1997. 「「甘え」理論と精神分析療法」金剛出版 182-192
- 土居健郎 2000. 「「甘え」理論の展開（土居健郎選集2）」岩波書店 127-159
- 土居健郎 2001. 「続「甘え」の構造」弘文堂
- 土居健郎 2007. 「「甘え」の構造～増補普及版 新稿「甘え」今昔収録～」弘文堂
- Hafsi, M. 1997. Valency and its measurement; validating a Japanese version of reaction to group situation test (RGST). *Psychologia*, 40, 152-162.
- Hafsi, M. 2004. 「「愚かさ」の精神分析～ビオンの観点からグループの無意識を見つめて～」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. 2006. The chemistry of interpersonal attraction: Developing further Bion's concept of "valency". *Memoirs of Nara University*, 34, 87-112.